

## 神様との絆は切れず

丸山 勉

〔聖書〕 マルコによる福音書 15章46～47、16章1～8節

ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つけていた。安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なされて、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

〔序〕 イースターは単純な喜びか？

イースター、おめでとうございます！

主イエス・キリストの復活・およみがえりを祝う礼拝から、丁度4月の新年度を迎えることが出来ることは気持ちがいいですね。桜の花びらが美しく舞う中で、私たちは今年のイースターをも迎えさせて頂いています。

けれども、考えてみますと、私たちはつい数日前まで、イエス様の受難と死を覚える時を過ごしていたのです。イースターは確かに喜びです。「ハッピーイースター」と言っても間違いがない大きな喜びです。けれども、私たちは本当によく覚えておきたいと思うのですけれども、「復活」の前には、イエス様はあの十字架の苦しみと死を経なければならなかったということです。

〔1〕地上の生涯を歩み抜かれたイエス様

福音書の受難物語にもう一度思いを馳せてみて下さい。なぜイエス様はあれほどのお苦しみを受けなければならなかったのでしょうか？マルコ福音書15章にこのような描写がありました。15:29以下です。ここでは既にイエス様は十字架に架かれています。

そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

つまり、イエス様は全く抵抗をしなかったのです。自分に敵する者たちにされるがままです。イエス様は神の子でありますから、十字架の上からでも神様の力を振るい、ののしる者たちをぎゃふんと言わせ、ひれ伏させることも出来たと思います。しかし、そうはなさらない。私は改めて主の受難を思い巡らす中で思ったのですが、イエス様は、神の独り子でありながら、本当に人間一最も弱く惨めな人間としての歩みを歩みぬ

いて下さったのだなあ、と思いました。それは、決して自明のことではなく、イエス様の私たちが救うための戦いでもありました。イエス様は神様に従う中で、そのような最期を神様の深いみ心として選び取られたと言えると思います。

言い方を変えれば、イエス様は、最後の最後まで、その御足を私たちが生きるこの地上から離されることはなかったのです。聖書を読んで私たちが驚いてよいのはそのことです。ですからイエス様はこの地上で、私たち人間の罪が極まった十字架の場面に至っても、ひたすら人間たちのご自分への嘲りと暴虐を甘受されました。そして、最後はあの「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との絶望の叫びを上げ、人間としての死を味わわれたのです。この死は、神の独り子の言葉とは思えないような死です。人間が思わず神様を呪いたくなる時に発してしまうような現実を知っている人の訴えの言葉です。

## [2]「風の電話」

そこで私はひとつのテレビ番組を思い起こしました。

東日本大震災から5年が経った二年前に、NHKスペシャルで「風の電話—残された人々の声—」という番組が放送されたものです。再放送もされたのでご覧になった方もおられると思います。

「風の電話」とは、津波の被害が甚大だった岩手県大槌町の海を見下ろす丘に静かに置かれている白い電話ボックスの中の、昔ながらのダイヤル電話です。いわゆる「いのちの電話」ではありません。この電話、回線はつながっていません。けれども、震災で亡くなった、或いは行方不明になった家族や大切な人ともう一度つながりたいと願う人々が、遠くからもここを訪ねるのだそうです。番組では「本人のご了解を得ています」というテロップと共に、その電話ボックスの中で発せられたその人たちの「声」を紹介していました。

たとえば、初老の男性が長年連れ添って行方不明になってしまった奥さんの名を呼んで、「生きてろー、どこにあっても生きてろー、さみしいぞー」と叫んでいました。または、30～40代くらいの男性、この方も奥さんとそしてお子さんたちを失ってしまったのですが、「ごめん。ごめん。助けてあげられなくて本当にごめん…。時々何で生きているのか分からなくなるよ。でも俺が死んだら三人が生きていたことを話せなくなる…」と涙を流しながら言っていました。またあるご婦人は、電話を手に取りダイヤルを回しても、受話器に耳をあてるだけでひと言も発しません。あとで分かるのですが、そのダイヤル番号は、流されてしまった家の電話番号で、津波の時、ご主人が家の中にいたのだそうです。「もう使えなくなっている番号なんですけれども、主人の声が聞こえるような気がするんです」と微笑みながら語っていました。

## [3]残された者たちの大きな苦しみ、自責。

番組を見て、容赦ない「死」に直面させられる時、当の本人も苦しいと思いますが、もしかすると、その人以上に残された者たちの苦しみは大きいのかもしれないと思いました。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」、この祈りの言葉について思いめぐらしていた時、ふと思ったのですが、もし自分が神様から見捨てられたと感じることがあるとしたら、自分自身が苦しむことよりも、誰か愛する者が死んでいたり、苦しむ姿を見たりして、そのことに対して自分が何もすることが出来ない時ではないかな、と思いました。神様は何か私に罰でも与えているのかとってしまうこともあるかもしれません。

そして、そこには自分を責める思いが沸き起こってくるということがあると思います。先ほどの父親のように、「ごめん、ごめん」としか言えない。「どうして自分は助けられなかったのか」「自分が死んだほうが良かった」と思ってしまう。…私たちはその人に、そんなことはないよ、誰のせいでもないよ、あなたが自分を責めるのは違うよ、と言うことが出来ても、まことの癒しというものを、人間は与えることなど出来ないのではな

いでしょうか。

被災者だけではありません。私たちの内には、時に、そのような声にはならない呻きが沸き起こります。

私は、イエス様を結局見捨てるようにして散ってしまった弟子たち、また、イエス様の十字架を見上げながら、嘆くことしか出来なかった女性たちは、本当に心からイエス様を愛し、その語られる言葉を喜んで聞き、従ってきただけに、言ってみればイエス様を見殺しにしてしまった自分たちを本当に悲しんでいたと思うのです。よく、弟子たちはイエス様のように自分たちも捕らえられることを恐れていたと解釈されますが、それもあつたと思いますけれども、もっと深い挫折を感じていたのではないかと思うのです。「イエス様に選ばれた俺たちは一体何だったんだ?」「あんなに素晴らしいお方を、俺たちは、俺は、殺させてしまった」「もう俺たちは神様に捨てられても当然だ。神様、俺たちはもう生きる意味などないのではないか」そんな思いに捉えられていたのではないかと思います。

3人の女性たちも、イエス様が死なれて本当に失意の中にあつたことと思います。自分たちの無力さを痛感していたことでしょう。そして、せめて自分たちに出来ることは、イエス様の屍に香油をお塗りすることだと思っていたのでしょう。そこにあつたのは「イエス様、何も出来なくてごめんなさい。さようなら」といったむなしい思いだつたのではないのでしょうか。

#### [4]「復活」とは、イエスと再び会う約束

先ほどの「風の電話」も冷静に考えればむなししいと思います。線もつながっていませんし、そこで再び愛する者の声を聞くことは出来ない訳です。けれどもこの電話を作った男性は言っていました。「つながりたい」、その強い思いはきっと風が運んでつなげてくれる、それを信じたいという思いから、実は、自分の妻を亡くした深い喪失感から抜け出したいと、自分のために作ったのですよと語っていました。それはまだ震災前のことでした。それから震災が起こり、被災者の家族たちが段々とロコミで来るようになったということです。多くの方たちが「初めて自分の心を吐き出すことが出来た。ここに来ればつながれる気がする」と仰っています。

そうですね、人間の癒しというのは、自分の中から生まれて来るのではなく、愛する者との関係の中で与えられるものなのではないのでしょうか。

マルコ福音書が書きたいことも、15章で終わるのではなく、その続きがあるということです。そうです、「復活」です！弟子たちはイエス様を見捨てた後、信仰がぐらつき、生きる意味も喪失し、また女性たちにとっても、もうイエス様とのことは「思い出」になろうとしていました

けれども、神様は一度人間たちと結んだ絆をご自分から切ってしまうことはなさいませんでした。16章を見ますと、誰よりも神様ご自身が、イエス様を失ってしまった悲しみと自分自身の罪深さにうずくまっていた者たちに、先手を取って近づいて下さったのです。既に墓の前の大きな石は取り除かれ、更にイエス様が収められた墓の中にはイエス様の屍はなく、そこには若者の姿をした天の御使いが座っていたのです。彼は神様からのメッセンジャーです。女性たちにこう語りました。

若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。

「あの方(イエス)は復活なさって、ここにはおられない」。墓は、神の子イエスを収めることなど出来ないと、イエス様の復活の事実だけを告げます。驚くべきことです。どこにも、弟子たち、また女性たちを非難する言葉はありません。あるのは、ただ「あなたたちはもう一度イエス様に会うのだ」という約束です。そうです！「復活」というのは、死んだ人の蘇生ではありません。あなたが捨てたイエス・キリストが、あなたを赦し、あなたともう一度会う、あなたとの交わりを築き直す、ということです。

「あの方は復活なさって、ここにはおられない」。今、ようやくイエス様は、地上からその足を離されたのです。私たちに代わって十字架で血を流されるまでは、この地に留まっていたくださいました。今や、イエス様も私たちに対するその神様の御わざを成し遂げられ、自由な者となってよみがえられたのです。それは、私たちとの絆が消えたのではなく、逆です！その絆は永遠になったのです。

フィリピの信徒への手紙の2章に書いてあるとおりです。

キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。(2:6~9)

[結]主イエスの復活は、私たちの復活のひな型、初穂

主イエスの復活は、私たちの復活のひな型、または初穂だと言われます。キリストが全人類の長子として復活の命に与ったので、彼に続く者も皆、滅びない命、復活の命にあやかれるのだ、とパウロは語っています。それは一種の神秘的なことかも知れませんが、一番大切なことは、神様は私たちのことを見捨てることは決してない、ということです。なぜなら、イエス様ご自身、既に十字架の上で、私たちの罪の故の滅びを、ご自分の命と引き換えに受けて下さったからです。

今日読んで頂いたマルコ福音書の最後の言葉は、「恐ろしかったからである」という言葉です。福音書らしからぬ締めくくりの言葉かもしれません。でも、よく考えたら本当にそうだと思います。神様のなさることは常識を超えた恐ろしいことなのではないでしょうか。すぐに復活を理解できなくても良いのです。神様が、弱く、罪人である私たちのためにこんなことをしてくださったとは、信じがたいことなのです。けれども、これは真実です。私たちに対する神様の愛は、揺るぎありません。私たちの生は、キリストの十字架によって常に担われ、私たちの死は、このお方の復活によって、孤独でも暗闇でもなく、光そのものであるお方との永遠の交わりの入り口なのですね。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様

新年度の始まりの一日を、主イエス様の復活をご一緒に喜び、その恵みに与る礼拝から始めさせて頂き、心から感謝申し上げます。

罪人の私たちです。あなたを十字架につけてしまった私たちです。けれどもあなたは一度私たちを選び、築いてくださったその絆を、私たちの罪ゆえになしとすることなく、むしろ、イエス様の復活によって決定的なものとして結んで下さいました。そのあなたの恐ろしいほどの愛を、今頂き、感謝申し上げます。

主よ、この川越教会が、あのみ使いのように「主はこの墓場にはおられない。復活なされたのだ」と、いつも生ける主を証することが出来ますように。そして、この喜びの主の交わりの加わる方々が起こされますよう、私たち一同の働きも強め、祝してください。

今、あなたの助けを必要としている兄弟姉妹を覚えております。あなたご自身がいつも共にいて下さり、

励ましと慰めとを豊かに与えてくださいますようにお祈り致します。  
復活の主の御名によってお祈りいたします。  
アーメン。